

九州伝産の旅

vol. 7

2022年

山鹿灯籠 中村制作所

灯籠師 中村潤弥氏

<工房紹介>

中学の時に授業で金灯籠を制作。もともと、物づくりに興味があったということもあり灯籠師という仕事にあこがれを抱く。徳永正弘氏に師事。奥様が運営されているアンテナショップ「ヤマノテ」に工房「山鹿灯籠 中村制作所」を併設。「ヤマノテ」では国の伝統的工芸品指定の和紙工芸 山鹿灯籠を取り入れた暮らしの提案を行うとともに、生産者と消費者、地域を繋げる活動を行っている。

やまがとうろう

山鹿灯籠 中村制作所

新たな収益モデルの構築と工芸品を取り入れた暮らしの提案

風情ある山鹿の道沿いに佇むおしゃれなアンテナショップ「ヤマノテ」に併設された中村制作所。最年少の灯籠師として、産地改革に積極的にチャレンジされている中村潤弥さんにお話を伺いました。



中村潤弥さんと奥様の京さん（ヤマノテ店内にて）



中村灯籠師の作品「宮造り」



灯籠制作の様子

■ 山鹿灯籠の歴史・特徴

山鹿灯籠は、木や金具は一切使わず和紙と少量の糊だけで立体的に組み上げる伝統的工芸品です。金灯籠に始まり、宮造り・座敷造り・城造りなど様々なものがあります。曲線部分はのりしろが無く和紙の小口（厚み）だけで貼り合わせます。なだらかな曲線を美しく仕上げる技術は鍛錬の成せる技（紙技・かみわざ）です。

和紙の原材料である楮の栽培及び紙漉きが全盛期であった江戸時代、山鹿の繁栄を支えた「旦那衆」とよばれる実業家によって和紙工芸による技の競り合いが盛んになりました。そうして、藩主をもてなすものとして、神事の奉納品として、人を呼び込む観光資源として発展し、和紙工芸「山鹿灯籠」が確立したといわれています。金灯籠を頭に掲げた女性が舞い踊る「山鹿灯籠まつり」と一緒に山鹿灯籠も発展・成熟し、現代に続く伝統的工芸品として山鹿の人々に大切にされています。

※山鹿灯籠振興会 HP より引用・編集。

Q. 山鹿灯籠とはどのようなものですか？

山鹿灯籠といえば、山鹿灯籠まつりの「千人灯籠踊り」で頭に乗せる「金灯籠」のイメージが強いと思いますが、「千人灯籠踊り」は、昭和 30 年頃に観光資源として新たに考案されたもので、山鹿灯籠の原点は奉納灯籠です。現在も祭の際に企業・団体等が灯籠を神社へ奉納する神事があり、奉納灯籠の制作が灯籠師の最も重要な仕事です。



山鹿灯籠まつりの「金灯籠」



奉納灯籠の展示（山鹿灯籠民芸館）

Q. 中村さんの作品の特徴を教えてください

特別に得意なジャンルというのではなく、自分が興味のあるものや、つくりたいものを山鹿灯籠の技術で表現するというスタイルです。もともと山鹿灯籠は祭の際に展示し、皆さんに見ていただくというもので、皆さんになるべく興味を持っていただけるものを題材にするよう、心がけています。



中村灯籠師制作「三陸鉄道南リアス線」

Q. 灯籠師になろうと思ったきっかけは？

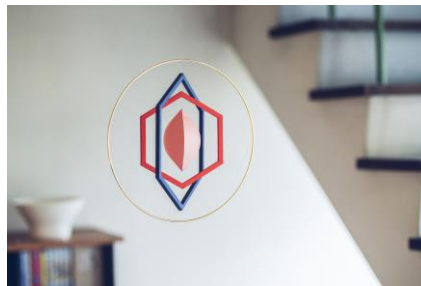
中学の時の体験授業で山鹿灯籠の制作を体験したことがきっかけです。3 日間の職場見学でしたが、その後もずっと印象に残っていて、進路を決める際に、就職先として考えました。当時は「灯籠制作をやりたい」という気持ちだけで、正直あまり「職業」を選ぶという感覚はなかったと思います。高校卒業後、工房に弟子入りを希望したところ、断られてしまい、観光協会で 1 年働きました。その後、徳永正弘先生のお弟子さんに相談して徳永先生への弟子入りを頼み込み、なんとか受け入れてもらいました。徳永先生の元で 8 年修行の後、2017 年に灯籠師に認定され、中村制作所としての工房を立ち上げました。

Q. 修行中の苦労や、師匠から学んだことを教えてください。

弟子入り後は、基本的に師匠の作品の部品づくりが主な仕事でした。上手にできないと捨てられますし、上手にできても褒められることはありませんでした。はじめは新鮮で良かったのですが、弟子入り後、3～4 年目くらいに、周りの友達が就職していく中で、自分は毎日同じ作業の繰り返しで成長の実感が全く持てず、とても辛かったことを覚えています。師匠は好奇心が強く、作りたいものを作る人でした。接着面が美しく、作品の仕上がりがとても柔らかいのが特徴で、尊敬するところです。よく言われたのは「人の真似をするな」ということです。道具の整理整頓も師匠から教わりました。私も几帳面なところがあるので、その点、師匠とはとても合っていたなと思います。

Q.産地としてはどのような取組を行っていますか？

山鹿灯籠振興会では、山鹿灯籠の魅力をより多くの方に知ってもらうため、また職人の安定的な収入につなげるため、現代のライフスタイルにあった商品開発を行っています。これまでに紙の軽さを生かしたモバイルや和紙の吸水性を生かしたアロマディフューザーなどを開発しました。開発にあたっては、産地で意見を集約してデザイナー等と意見の折り合わせを行いながら進めています。また、産地の収益につなげることを意識し、販路の開拓等にも力を入れるとともに、産地内で新商品の生産体制を確立し、長く、しっかり売って行くことを目指しました。今では産地内で、ある程度分業ができる体制が整っています。はじめは産地内でも現代風の商品開発にアレルギー反応がありましたが、実際に売上につながると、理解を得られるようになってきました。



山鹿灯籠の技術を活かした「モバイル」と「アロマディフューザー」

Q.体験事業も実施しているのですか？

山鹿灯籠振興会では、体験の出張指導も行っています。また、自宅で制作できる「山鹿灯籠制作体験キット」も開発しています。令和3年度はコロナ禍も踏まえて体験キットの制作動画も作成しました。難易度別に4つのキットから選べるので、お子様から大人の方まで幅広く楽しめます。



山鹿灯籠制作体験キット

Q.アンテナショップ「ヤマノテ」をオープンした目的は？

山鹿の街には山鹿灯籠のマークやオブジェがいたるところにあるのですが、山鹿灯籠を販売する専門店はそれまで一軒しかありませんでした。自分が店頭で立って売ることが難しいけれど、もっと身近に灯籠を感じられる場所が必要だとは思っていました。妻がもともと地域学を専門に学んでおり、地元で作られる工芸品や食品を山鹿の人に知ってもらえるような場所を作りたいという思いがあったので、独立とともに工房の一階を店舗にし、山鹿の手仕事品と山鹿灯籠を販売しています。

Q 近年の取組は？

近年の取組としては、『ONE PIECE』のゴーイング・メリー号を制作しました。もともと私がONE PIECE ファンなのですが、作者の尾田栄一郎さん（熊本県出身）が熊本地震の際に熊本に寄付をされたことから、熊本県からの返礼品として、山鹿灯籠でメリー号を制

profile

工房名

山鹿灯籠 中村制作所/ ヤマノテ

場所

熊本県山鹿市山鹿 1375

電話

0968-41-8405

定休日

月・火・水曜

営業時間

11:00~17:00

Web サイト

<https://yamaga-yamanote.com/>



作り、尾田先生に贈呈させていただく機会をいただきました。その他には、熊本市現代美術館で開催された「ジブリの立体建造物展」において、熊本限定展示ということで、『天空の城ラピュタ』を制作し、展示いただいたことも印象に残っています。



和紙のみで表現された「ゴーイング・メリー号」と「天空の城ラピュタ」

Q.中村さんのモットーを教えてください。

見て楽しい、作って楽しいなど、色んな意味で「楽しいこと」を重視しています。休業時代は自分の色を出すことはできなかったの、独立した今だからこそ、色々やってみたいという思いはありますね。



Q.今後の目標は？

奉納灯籠が最も力を入れる仕事なので、毎年見てくださる方々の印象に残るような作品を生み出すことが一番です。そのために、日々の生活の中で自分自身が興味が湧くものにアンテナを張り、それを技術でどう表現できるかを考え続けていこうと思っています。産地に関しては、いつなくなってもおかしくないという危機感がありますが、まずは自分がモデルとして自立し、生計を立てることが大事だと思っています。どんな職業でも同じですが、「きつい」「儲からない」などマイナス面に着目するのではなく、生き活きと楽しく仕事をしていたら、自然と後継者も出てくるのではないかなと思っています。

Q.山鹿灯籠の魅力、山鹿の魅力を教えてください。

山鹿灯籠の魅力は、文化的な側面や、地域と密接につながっている点ではないかと思います。文化やアイデンティティーのようなものが失われつつある中、独自性のある文化ではないかと思います。また、山鹿は温泉や古墳、豊前街道のまちなみなど、観光地としても素晴らしいですし、気候の良さや生活のしやすさ、まちのコンパクトさも魅力です。

「ものづくりが好き」という純粋な気持ちで灯籠師になったという中村さん。自分が作って楽しい作品を制作することで、結果的に人にも喜んでもらえたらという自然体のスタイルが、話題を集める作品創出につながっているように感じました。若い感性やネットワークを活かしつつ、夫婦二人三脚で地域の魅力発信に熱心に取り組んでおられる姿がとても爽やかでした。